

歩く人が多くなれば道になる

—同志会大阪支部の研究、組織、運動とは—

前田 雅章（相愛大学）

1. 同志会の理念と活動の基礎

「華々しい発会式を開いたわけではなく、むしろ極めてひっそりとではあるが、しかし固い決意で発足した」（丹下保夫）。1955年1月19日、学校体育研究同志会（以下「同志会」）は丹下保夫と若い教師たち7人によって創設された。丹下は戦前戦中の「皇国民の錬成」に身を挺した反省から戦後の民主主義にすべてをかける。「敗戦によって過去との断絶を余儀なくされた人は多数いるが、体育の研究分野において丹下ほど真摯に敗戦の現実を受けとめた人は少ない」（唐木國彦）。

この同志会創設者丹下の精神、そして同志会の理念と活動の基礎は「私たちの誓い」に表れている。「私たちは、日本国憲法と1947年教育基本法の精神を、平和、独立、民主主義の社会建設をめざす国民教育の基軸とし、科学的、かつ創造的な実践と研究を行い、日本の子どもたちの明るい未来を築きあげていくことを誓う」。

同志会は戦後民主主義教育の一翼を担ってきた民間教育研究運動団体である。その研究や実践は常に政治や社会の情勢を見極め、また学習指導要領の問題点を指摘し、それらを乗り越える実践を子どもたちと創り上げてきた。学習指導要領に沿って、授業の指導方法だけを研究実践する官制教育研究とは全く違うのである。

現在、コロナ禍で社会全体の「あたりまえ」が問い直されている。教育現場においても、「授業数確保」「学力保障」「オンライン化」など表層的な言説に対して、改めて「学校と

は何か」「教育とは何か」を問い直さなければならぬ。

コロナ禍で教育活動全体が硬直、委縮する中、同志会は「新型コロナ」に立ち向かう健康教育や集団での学びを大切にする授業に挑戦した。これはまさに社会や子どもたちの要請から生まれたものであり、「私たちの誓い」の理念と活動の基礎が脈々と受け継がれている。

2. 大阪支部誕生から15年

（1）大阪支部結成と組織拡大へ

1971年4月、黒田革新府政が誕生。それまで「高度経済成長」のひずみと矛盾がうっ積していたが、革新府政は、このひずみをただし、憲法を生かして、福祉、教育、環境、中小企業分野で全国に誇る施策を実現させていった。こうした社会変革の息吹を背景に、同年6月26日大阪支部が「なにわ会館（現ホテルアウィーナ大阪）」において会員数十名で結成された。記念講演は当時同志会全国委員長であった中村敏雄。演題は「体育カリキュラムの考え方」で、中村のヨーロッパ視察スライドも上映された。

1974年からは「会員拡大に自覚的に取り組む」方針を出した。それを受けてスキーフェスティバルと実技講習会を実施する。1976年からは年間活動パンフを大量印刷して府下に配布し組織拡大に乗り出した。

1976年1月第1回大阪支部主催スキーフェスティバル。実行委員長は我孫子勉（当時天王寺商業）。なお、このスキーフェスティバル

は30年続き2006年1月で一旦終了した。

1979年から4ブロック体制に踏み切った。その理由は、一つは会員増であり、二つは1977年学習指導要領改訂に対峙するために地域と密着した組織づくりの必要性にかられたからである。

1979年9月から月曜学習会開始。「大学のゼミに負けない」「明日の授業に役立つ」（10年後には役立つ）勉強をやる」を合言葉に1986年3月第247回まで足かけ8年間毎週欠かさず続けられた。テキストは岩波講座「子どもと発達段階と教育」全8巻。続いて基礎理論学習会（学力論コース「スポーツを考えるシリーズ」全5巻、スポーツ権コース「運動文化論」）と健康教育学習会（「教育としての学校保健」「健康教育概論」）が発足した。

1981年9月からは6ブロック体制となる。「地域に密着してこそブロック体制の意味があるのであり、広域ブロックを分割していくことがブロックの発展、ひいては支部の発展につながるのである」と熱い決意があった。

同年同月からはプロジェクト研究も開始。水泳、障害児、舞踊の三つのプロジェクトが発足した。この時から指導法研究だけでなく教材の背景にある文化についても研究の対象にしていた。例えば、舞踊プロジェクトでは「舞踊は、観念論や機械論、修正主義や教条主義の思想や理論が横行している」との指摘から文化や芸術について学ぶ必要があり、そこで「マルクス＝レーニン主義の文化論（新日本新書）」まで学習を広げていった。この文献で「芸術が他の文化と同様に他の動物の持っていない人類特有の創造活動」であり「舞踊の起源は模倣そのものにあるのではなく、労働にあるのです。田植え歌や村の踊りの多くが農業の労働から生まれているのと同じです」と学ぶ。そして舞踊プロジェクトが目指す舞踊像を探っていった。

79年度以降、支部組織発展が多様な活動を

生み出し、学校施設利用では活動が困難となり、1982年2月には弁天町の「みなと交流センター」に事務所を開設した。しかし、残念ながら地域医療センターの拡張のため1983年9月で撤退。1年半と短期間であった。

82年度からは中河内ブロックが初めて民舞教室を開催し、その後各ブロックでも行われ現在に至る。83年度からは水泳教室も開催されるようになった。

（2）支部ニュース誕生

1973年9月30日、大阪同志会ニュース第1号発行。もちろん手書きである。第一面は新入会員で前田佳三（当時26才）が紹介されている。あと例会案内。その後も第一面には例会案内が続く。

今のような巻頭言が登場したのは、1980年8月25日第64号からである。「総会はあなたが原点にもどる日」と執筆したのは当時支部長の新堂達夫。総会参加への呼びかけと、今の右傾化の風潮を批判し「私たちの誓い」の精神にふさわしい活動を前進させようと訴えている。66号では出原泰明が「自前の思想をもとう 一身ゼニを切る 「民」の誇り！一」と、権力や金力がない我々の武器は「内容」であり、「民」の立場に立つことの意義を語っている。続いて、土佐朝一、前田佳三、淡口利幸、松下孝雄、榊原義夫、当時の支部常任委員会のメンバーが代わる代わる巻頭を飾っている。この巻頭言は、社会や教育情勢を踏まえた各自の問題意識を提起し支部の研究実践や組織活動の羅針盤となっていた。

「同志会ニュース」のタイトルデザインの変遷もあり、それを85年当時の支部編集局の小池深志が「KICK OFF」支部15年史で紹介している。

（3）支部機関誌「KICK OFF」創刊

1985年8月全国研究大阪大会の半年後の1986年2月27日「KICK OFF」創刊。巻頭論

文は当時若干 28 才内田智子の「ポドテキスト研究が生まれた背景とその成果」であった。他の内容は、岡村修の「走り高跳び」実践記録、冬大会をはじめとする各種報告、安武一雄の「学力と学習集団の理論」の誌上学習会、黒井信隆と榊原による書評、最後には榊原による「臨調下のスポーツテストの行方」の研究報告などと、支部ニュースとは違う硬派な研究理論誌を目指した。機関誌創刊を主導した初代編集長・榊原は編集後記で「40 ページは薄すぎる」と残念がるが、内容は多岐にわたり重厚で理論誌にふさわしい。

同年 6 月 22 日には、機関誌「KICK OFF」臨増（通刊 2 号）「大阪支部 15 年史」を発行。この号は、刊行したのは大阪支部創立 15 周年記念事業プロジェクトで、当時の支部が精魂込め全力投球したものになっている。上田富夫（事務局）、内田（研究局）、小池深志（編集局）の 3 人が、それぞれの立場で同志会活動 15 年間のあゆみを、そしてその成果と課題を詳細に記している。

中でも圧巻なのは、15 年の大阪支部年表作成、それも支部研究や組織活動と社会的時事と照合させている。さらには、大阪支部先行研究文献目録があり、大阪支部全会員の執筆したものを「資料的価値分類法試案」（左下図）

表 1. 資料的価値分類法試案

保存性(時間) ↓ 現存 O せず	広汎性 → (空間)			
	A 支部メディア	B 地域メディア	C 同志会メディア	D 全国メディア
I レジュメ	1 支部例会 2 ブロック例会 3 プロジェクト関係 (含'82支部教育講座) 4 総会方針案・総括等 主要な組織活動報告	1 大教組教研 (含、単組教研) 2 関西・近畿ブロック 集会 3 サ連協関係の集会	1 中央主催研究部合宿 ・教育講座、全国大 会速報の「分科会の まとめ」全国大会持 参資料等	
II 冊子	1 実践講座テキスト 2 支部大会提案集('83、 '84) ('86より兼支部研 究紀要) 3 プロジェクト等の冊 子(別表参照) 4 個人冊子(別表参照)	1 小中高体連、官制研 関係の発行物	1 全国大会提案集 2 同志会ニュース 3 NOVA 4 「くだおれ」など	1 日教組教研大阪代 表レポート
III 雑誌	1 『KICK OFF』 2 支部研究紀要	同上 定期刊行物 ex『体育のあゆみ』	1 『体育グループ』 2 『運動文化』 3 『運動文化研究』	1 『たの・スポ』 2 『体育科教育』 他団体機関誌など の一般市販雑誌
IV 書籍	1 『支部ニュース 100号 縮刷版』 2 『大阪支部15年史』		1 『主体者形成への道』 『同 II』	学校体育叢書。 教育実践事典等 市販の著作物 (別表参照)

で、まるで図書館の図書分類表ごとく分類、整理され記載していることである。日々忙しい現場教師がパソコンも普及していない時代に、これだけの資料整理ができたことに唯々感嘆する。ここには、大阪支部会員各々の実践記録執筆に対する敬意と実践研究の記録化を重視する当時の幹部の強い思いが込められている。

この号では、支部結成 15 年で各方面からの祝辞も掲載されている。その中で、大阪サ連協会長・高浜介二（当時大阪教育大学）は「このサークルは理論を追求しています。体育理論は勿論のこと、子どもの発達、子どもの生活とその変化、その土台としての社会や政策にも目を開き、教師としての、体育教師としての、心を豊かにしようとしている」と大阪支部研究運動の内容と方向性を高く評価した。

続く創刊 3 号は 1987 年 7 月 21 日発行。これ以降は、学期に一度、年三回の発行は実に 1993 年 12 月 25 日発行 23 号まで続く。なお、24 号からは毎年一回発行で現在に至る。

(4) 支部研究大会開催

1983 年 7 月 27 日 28 日 29 日、2 泊 3 日で第 1 回大阪支部淡輪大会が開催された。同志会の支部が独自で研究大会を行うのは大阪が初めてであった。この大会は、支部会員 150 名で参加者は目標の 3 桁 100 名を達成した。参加者で遠泳も行った。実行委員長は武藤、基調報告は黒井信隆「子どもの発達を見通した体育の授業」、記念講演は出原「子どもが主人公になる授業とは」。

黒井は基調報告で、当時の体育・スポーツをめぐる情勢を分析すると共に、「発達の最接近領域の理論（ヴィゴツキー）」を、これまでの発達研究や実践に引き寄せてマット運動やボール運動など具体的事例を示し、子どもの発達を見通す体育の授業を提起している。

分科会は、入門講座、実践報告、実技がセットとなっている。実践報告では、小中和代

(松原小)の4年生「方形マットを使った連続技づくり」(全11時間)が目を引き。連続技のマットの使い方について子どもたちと一緒に考え、最後の8種目連続技発表会では、方形マット上の演技で、連続技の順番と軌跡が詳細に記載されている。当時の技術指導の系統性研究の成果と連続技の習熟と完成度が伺える。なお、この第1回支部大会の収益は3,000円だけと語り草になっている。大会速報は「龍宮だより」。

翌年、第2回支部能勢大会が参加者120名で成功を収める。基調報告：新堂「21世紀を生きるスポーツの学力」、記念講演：秋葉英則「教育荒廃と子どもの発達」、実行委員長：岡村修、大会速報「新緑」。ちなみに、大レクは参加者全員でソーラン節を踊り、夕食のおかずは「わらじ大のメンチカツ一枚」だけだったことが、後年長い間の話題となった。

この支部大会の目的は、各ブロックの研究実践の発表、交流と来る全国大会開催への組織づくりであった。第1回の淡輪大会、第2回の能勢大会とも提案集は、執筆者の手書きで実行委員会が学級文集のように背表紙をテープで綴じ製本したものである。当時の執筆者と実行委員の大きな熱量を感じる。

大阪の全国大会後、1986年第3回支部大会(支部15周年記念大会)は、支部誕生の地・枚方で開催された。参加者は143名、提案集は初の活字印刷発行であった。基調報告：榊原「支部15周年とこれからの体育・スポーツの研究運動の展望」、記念講演：増山均(当時日本福祉大学)、実行委員長：柿木昭一、大会速報「とらい」。

3. 支部結成15年から受け継いだもの

支部創立15年の1986年当時は、1979年で黒田革新府政は幕を閉じたが、大阪には「憲法を暮らしに生かす」施策や財産は残っており、府政を奪還しようとする革新勢力は強大であった。

しかし、その後、自民党府政で大阪の教育政策は管理と統制を強めていった。2006年の教育基本法改悪後、多くの教育現場では教職員をバラバラにさせる仕組みが築き上げられてきた。とりわけ大阪では2012年大阪府教育基本条例成立後、新自由主義教育改革が進められ、また、教員間を分断させる「評価育成システム」によって「物言わぬ教師」が増加してきた。今では、支部結成15年当時とは比べようのないほど、教育現場には自由と民主主義がなくなっている。

このように社会・教育情勢が悪化してきたにもかかわらず、大阪支部は支部結成から15年で組織されたものを全て受け継ぎ維持している。

支部研究大会は36回を迎える。支部例会、ブロック例会、これを支える基幹組織会議(5役会議、常任会議、3局会議【事務、研究、編集】、「たのスポ」編集会議、ブロック会議)も定期的に開催されている。年に一度の支部・ブロック総会開催とそのための総括と方針文書も作成し続けてきた。支部ニュースは500号に達し、支部機関誌「KICK OFF」は本50周年記念号で50号だ。ブロック、プロジェクト研究活動も栄枯盛衰はあるものの存続している。2001年7月15日から牧野満が開設した支部HPは同志会本部のものより充実している。現在唯一、途絶えたのはスキーフェスティバルだが、これも子育て世代の支部会員から開催への機運が盛り上がっている。ポストコロナ期には再開されるであろう。

86年当時、同志会全体の会員は1,415人、内大阪支部は161人で支部の全国に対する会員数割合は11.4%であった。現在、同志会全体の会員は600人と激減したが、大阪支部は123人プラスOSBG'Z会員(OB・OG会員)36人の合計159人で、全国の会員数に対する割合は26.5%に上っている。

大阪支部は、組織活動と会員数の維持だけではない、研究実践でも全国への発信を続けている。京都支部の塩貝光生は「OSBG' Z会だより 2021年2月号」で次のように述べている。

11年間の合計

支部	レポート数
大阪	116
東京	68
兵庫	43
宮城	38
埼玉	37
愛知	32
京都	32
広島	29

「2010年の京都大会の準備過程で、夏大会の実践報告をどの支部がどれくらいになっているかを調べたことがきっかけで、2019年和歌山大会まで毎年の提案を蓄積してきた。上の一覧表は11年間の上位10支部。大阪支部はダントツの116本。基調提案や研究報告も含んでいるが平均しても毎年10本レポートされている」。そして続けて「これだけの研究実践ができるのは大阪支部の組織体制が盤石だからこそ今に至る」。

4. 大阪支部の力、それは組織

支部例会、ブロック例会、プロジェクト例会等々で実践報告を行い、支部研究大会に臨む。そこで検討され論議され実践がもまれ、全国大会に自信をもって提案、報告できる。この研究スタイルが、塩貝が調べたように全国大会のレポート数で大阪がダントツな数に表れている。まさにこうした発表と論議の場が大阪支部には数多くあるからである。

牧野は『楽しい体育』に30年間対峙してきたし『めあて学習』にも異を唱えてきたが、体育の変化の源流は大きな教育の変化とともにあり、その変化を敏感につかもうとして来た。教育、社会の変化と向き合い民間教育研究団体としての価値観をすり合わせてきたのである。体育という窓から教育や社会を見る。こうした営みによって鍛えられていくものだと思う」（「KICK OFF」第41号2012年12月）と民間教育研究団体としての同志会研究運動

の矜持を語っている。

自由な実践や研究の場を保障するためには、自前の組織を創り、維持する必要がある。出原は「ヒモ付きでなく身ゼミを切って勉強すること、これは民間教育団体で生きる自分自身の証明であった。誰のためでもない。自分の金で、自分のために勉強するのであるから、何のために身ゼミを切るかという厳しい葛藤があり、捻出のためのたたかいがある。だからこそ身ゼミを切ることで自己変革が生まれるのであろう。……大阪支部の仲間はみな“しぶとい主人公”なのである」（支部15周年史1986年）と祝辞を送った。この“しぶとい主人公”が86年以降も脈々と受け継がれている。

瀬見秀夫は大阪支部の歌「みんなは同志会」をつくった。「大レク見て入ったら最後、地獄がはじまったねん、どういふこと？レポート書いて！編集部入り！実行委員やってや！仕事が次々やってきて、すっかりどっぷり同志会、ちょっと自信はついたけど、もうぬけられないどうしようかい」

凡人はどうしても楽な方に生きる。私自身同志会に入会しなかったなら、数年に何回か回ってくる官制研の研究授業の指導案を書くぐらいが関の山だろう。それも研究授業が終わったらそれで終了。その後の実践を記録化して発表する場合は官制研にはほとんどない。

一方、同志会では、研究例会に向けて実践を綴る、支部ニュースや「KICK OFF」にレポートや記事を執筆するなど、締め切りに追われて「地獄がはじまる」。だが、こうした主体的に自らを律して「身ゼミを切る」組織だからこそ、研究や実践の自由が保障される。また自らの実践を分析、文章化することで、自分の実践を客観化し、次に続く実践をより豊かにすることができる。

5. 同志会の家

『同志会の家』を建てよう」と中村敏雄が

全国同志会ニュース（1971年12月号）の巻頭で書いた。「これはマジメな話である」と書き出し、「わが同志会も自分たちの家を持つことができないだろうかと考え」マジメな夢を語っている。資金集めから安い土地を探し整地して建築までの具体的な計画を立て、その計画実行に際しては各支部の適任者の固有名詞まであげている。完成すれば他団体に貸して建設費用の借金返済し、さらに体育館とプールもつくって水泳教室を開き、体育館建設の借金も返すそうである。「これは本当にマジメな話である。どこかに安い土地はないだろうか」と結び、「マジメな話」と3回も念を押しているのは、当時中村が全国常任委員長として全国に行脚し同志会の組織拡大を精力的に行ってきた背景があり、本当に実現したかった、そして、当時の同志会の組織拡大の勢いでは実現の可能性があったということであろう。その後、中村の描いた「同志会の家」は実現しなかったものの、全国同志会員の「3,000万円募金」により1979年に新宿に同志会事務所が開設され現在に至っている。また、京都支部も「資料センター」として支部独自の事務所を設立した。

6. 希望はつくるもの

大阪支部創立から50年。「主体者形成への道ⅠⅡ」、「みんながうまくなる体育シリーズ」「ブックレット」、健康教育「子どもが動き出す授業づくり」、支部大会提案集、「KICK OFF」、支部ニュース、周年記念冊子等などの刊行物、加えて総会、支部例会、ブロック例会資料など、大阪支部は自分たちの研究と組織活動の足跡を常に文書化してきた。大阪支部の刊行物は、個人ではなく集団作業の賜物である。みんなで支え合い励ましあい、時には叱咤激励しながら書き綴ってきた。それは膨大な量で大阪支部の貴重な財産だ。

しかし残念ながら、この財産が各会員の手で散逸している。これらを集積、データ化し

共有することは、コロナ禍でますます重要になってきた。現在、牧野の個人的な努力で同志会資料がデータ化されているが、それを組織として充実させることは急務である。

一方で、大阪支部の財産を紙媒体の書籍として保存整理し会員が気軽に閲覧できる場をつくることはできないだろうか。かつて1年半だけだが、大阪支部は弁天町の「みなと交流センター」に自前の事務所を持っていた。1985年大阪大会目標の一つは財政的に成功して事務所建設の費用を捻出することだった。いわば当時の大阪支部の悲願は事務所建設だった。事務所は資料保管の場だけでなく、コピー印刷機、パソコン、ネット環境も整え、常任委員会を初め各種会議、学習会、さらには例会も開催できる。時には、例会後の交流会もそこでやってもいい。それだけではない、同志会関係の資料が揃っているのも、会員個人が研究や学習に没頭できる場にもなる。このように事務所は大阪支部の会員同志の研究と生活を統一した居場所になり、今後ますます厳しくなる社会、教育情勢の下、大阪支部が研究運動を進めて行く重要な基地となる。今後50年大阪支部が存続するにはやはり事務所が必要になるのではないか。

海堀政広は「希望はつくるもの」(支部ニュース1991.2.N0.182)と、魯迅の「故郷」の言葉に励まされ、今なすべきことの示唆を巻頭言にした。「一つは、希望はあるものではなくつくるものであること。二つは、ひとりでも多くの人に参加すれば希望は大きく確かなものになること。三つは、希望にいたるまでの道のりと道筋を明らかにすることが、ひとりでも多くの人参加を可能にすること」。大阪支部長年の悲願だった事務所建設に向けて「希望」をつくっていくことはできないものだろうか。これには多くの人参加が必要だ。

中村のように私も「これは本当にマジメな話である」。どこか大阪市内でアクセスのいい安い中古物件がないだろうか。